

JAF AE Newsletter



No. 30 (January 2010)

第6回海外研修旅行：韓国ソウル編

2009年度 JAF AE 海外研修報告

樋口謙一郎 (椋山女学園大学)

本学会は2009年度海外研修を、2009年11月22日から25日まで「韓国視察・研修旅行」として実施した。研修には、本名信行会長をはじめ、日本各地から10人の会員の参加を賜ることができた。世話人(訪問団長)は、僭越ながら筆者が務めた。

今年度の研修は、韓国の英語教育現場の視察を中心とし、市内の視察も盛り込んだ。以下、本報告では、視察先と視察の概要を訪問順に紹介する。各視察先での具体的な見学・活動内容のレポートは、河野円先生、木村隆先生が詳しく記して下さっているので、そちらをご覧いただければ幸いである。

1. 安岩初等学校 (23日午前)

前日(22日)のウェルカムディナーで顔合わせをした我々は、23日朝から早速視察を開始した。まず、訪れたのは「安岩初等学校」である(初等学校とは小学校のことである)。学校所在地に少々早く着いた我々は、近くの高麗大学のキャンパスをバスで見学した後、学校を訪問した。

安岩初等学校ではまず、李杰成校長先生が、韓国の第7次教育課程の部分修正・実施の動向と、安岩初等学校の英語教育の特色についてレクチャーして下さった。韓国の初等学校における英語の授業は、現在は3・4年生が週1時間、5・6年生が週2時間であるが、教育課程の部分修正を受けて2010年度から3・4年生が週2時間、さらに2011年度からは5・6年生が週3時間となる。安岩初等学校はソウル特別市教育庁から「英語教育先導学校」に指定されており、予算の重点配分を受けて校内に英語体験施設を設置し、放課後教育として補習班や1年生からの英語クラスも設けているという。ネイティブ教員もソウル市

教育庁の採用による1人に加え、独自予算によってもう1人を確保しており、「先導学校」の役割として、近隣地域の児童が放課後などにこの学校で英語を学ぶことも可能にしている。

我々は校長先生にご案内いただき、実際の英語授業2クラスを見学したほか、英語教員との簡単な懇談や、この学校の英語教育の取り組みを紹介する映像を観覧することもできた。

2. ソウル国際高等学校 (23日午後)



ソウル国際高校の先生方とともに

第2の訪問先は「ソウル国際高等学校」であった。ここは、2008年に開校したばかりの全寮制の公立高校で、多くの科目を英語もしくは英語・韓国語のバイリンガルで行われている。韓国には従来、英語科、仏語科などを置く「外国語高等学校」があったが、この国際高校は語学の重点強化よりも、グローバル人材の育成という観点から、道具としての英語を鍛えるカリキュラムとなっている。

イ・ビョンホ校長先生、チェ・チュンオク教監先生のあいさつと学校概要紹介の後、校内見学の形式でいくつかの教室を見てまわった、英語以外にも、第2外国語の中国語や経済の授業の水

準・スピードには驚かされた。1年生の中国語は、学習開始から8カ月程度のはずであるが、すでに中国語学習の大きな難所である“把”構文を学んでいた。経済は、米国の大学1年生の英語の教材を使用し、Ph.D.を持つ韓国人の先生が英語のパワーポイントを使って韓国語で授業を行うというユニークなものだった。

3. アリラン放送局 (23日午後)

第3の訪問先は「アリラン放送局」であった。ここは、韓国国際放送交流財団が運営する国際テレビ・ラジオ放送局で、韓国居住外国人や在外コリアンに向けた英語をはじめとする多言語のプログラムを、テレビ、ラジオ、そしてインターネットを通じて、24時間提供している。ここは、当初の訪問予定にはなかったが、この機会にぜひと思い見学を依頼したところだ。

放送局だからスタジオや制作フロアも見学させていただいた。これだけでも高校の修学旅行のようで楽しかったが、ラジオスタジオでは、文字通りのサプライズが発生した。生放送中の放送席に、視察中の本名信行会長が招き入れられたのである。韓国フォーク界のリヴィングレジェンド、ハン・デス氏のゴキゲンなトークとともに、本名会長はJAF AEの紹介をされ、本学会の存在と意義を世界に知らしめたのである。これには参加者一同、大興奮であった。

4. 京畿英語村坡州キャンプ (24日午前)

日付が変わり、翌24日もなかなか忙しかった。まず、訪れたのはソウル市内から車で約1時間半の京畿道坡州(パジュ)市に位置する韓国最大の英語村「京畿英語村坡州キャンプ」である。ここは、学校教育の補完、グローバル人材の育成を目的として、京畿道が運営している英語体験空間であり、欧米風の銀行や商店などが設置された敷地内では基本的に英語を使用することになっている。京畿道には、安山、坡州、楊平の3個所にキャンプがあり、今回訪問した坡州キャンプは韓国の英語村のなかでも最大規模の施設である。この日の見学は朝の開園直後のことであり、また新型インフルエンザの流行ですべてのプログラムを休止しているとのことで、施設内では人影もまばらだった。

ところが、ここにもサプライズが待っていた(世話人の筆者もまったく知らされていなかった)。園内を一周した後に案内された会議室に、このキャンプで1カ月間の英語教師研修を受けている中学・高校の先生方との懇談のテーブルが用意されていたのである。世話人は突如進行役を委ねられて慌てたが、先方、当方参加者とも和やかな雰囲気なかで両国の英語教育の現状について意見交換を行い、大変有意義な時間となった。

(※京畿英語村坡州キャンプについては、筆者は今回の研修にもご参加いただいた木村隆先生とともに2008年にも訪問しており、その際の考察を次の論稿にまとめているので、ご覧いただければ幸いです：樋口謙一郎・木村隆「韓国の『英語村』—現状と展望—」、『中部地区英語教育学会紀要』第39号・近刊、所収)



朝の英語村は寒かった

5. ソウル近郊・市内視察 (24日午後)

以上で、教育機関や放送局などの訪問は終わり。後の時間帯は、観光を兼ねて「オドゥ山統一展望台」と「昌徳宮・秘苑」を視察した。

上述の京畿英語村坡州キャンプの近くにあるオドゥ山統一展望台は、川の対岸に位置する北朝鮮の農村地帯を肉眼でも見ることができ、南北分断の現実がよくわかる場所である。施設内には、北朝鮮の日常生活や学校教育の紹介などもあり、英語教科書も展示されていた。

ソウル市内に戻って訪問した昌徳宮・秘苑(世界文化遺産)は、現地で設定されているツアーに参加しなければならないところである。日本語ツアーもあるが、今回は、事前に「韓国人の英語に

接してみたい」との希望も多かったため、あえて英語のツアーに参加した。

6. 韓国デジタル情報図書館（25 日午前＝エクスカーション）

25 日朝の「解散式」をもって研修の公式プログラムは終了した。ただ、最終日は、帰国便まで時間に余裕のある参加者もいたため、エクスカーションとして、2009 年 5 月に開館したばかりの「デジタル図書館」（Dlibrary）の見学を催行した。国立中央図書館の前庭のスペースを利用してつくられたこの国立の電子情報図書館は、書庫スペース不足や、電子情報の蓄積・整理・利用の方法の確立といった問題に対する韓国の取り組みとして、大変興味深かった。当日はあいにくの土砂降りのなかをタクシーに分乗して訪問したが、我々の滞在ホテルからも近く、訪問するだけの価値は十分にあったように思う。



カルビを囲んでのフェアウェルディナー

まとめ

今回の研修では、韓国のできるだけ新しい取り組みを見ることができるよう調整したということもあり、英語教育の先進的な部分を垣間見ることができた。韓国で公教育をはじめ社会の各分野で英語への取り組みが進んでいることについては、その「原因」と「結果」の両方において、韓国人の英語熱の高まりがある。また、英語教育の推進によって生じる教育の機会と結果の不平等や、政策と実態の乖離といった問題は、韓国だけでなく日本でも考えていくべきものである。今回の研修で視察したのは、中央政府や自治体、公的団体

による英語化推進という「公的事业」、それも「先進的な取り組み」の面であり、個人的には韓国のいわゆる「私教育」や早期留学に関する現場・実態について、今後さらに観察と考察を深め、日韓における「アジア英語」の意義や可能性を考えていきたい。

研修時、韓国では新型インフルエンザの流行が「深刻」レベルに達し、その影響でこの旅行も無事催行できるかどうか、世話人としてはおおいに心配したが、韓国教育科学技術部や視察先の方々の御協力により、最後まで予定変更もなく実施することができた。誠に感謝にたえない。また、ガイドの裴志瑛さん、アシスタント役を務めてくれた吉田智晃氏、パンフレットなどを作成してくれた筆者のゼミ生の皆さんにも感謝申し上げます。そして、ハードなスケジュールにもかかわらず、最後まで和やかで楽しい雰囲気での研修を盛り上げてくださった参加者の皆様、ならびにこの研修をサポートしてくださった JAF AE 会員の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

エリート英語教育を目指す

小学校と高校を訪問して

河野 円（星薬科大学）

日本「アジア英語」学会に入会して日も浅い 2009 年 11 月 22 日から 25 日まで、韓国視察・研修旅行に参加した。有意義で貴重な見分を得た 4 日間であったが、ここではトップクラスの英語教育を目指す小学校と高校訪問についてご報告し、若干の感想を加えたい。

まず、最初に訪問したソウル市内の安岩初等学校では、通常の英語の授業に加え、Giant English と呼ばれる英語センターで、放課後、希望者を対象に英語の授業が行われている。我々は、ネイティブスピーカーの先生と韓国人の先生のチームティーチングで行われている小学校 4 年生と 5 年生の英語の授業を参観した。生徒数は 1 クラス 25 名前後、基本的に英語で授業が行われており、生徒は先生の英語の指示を、パターン化したクラスルームイングリッシュとは言い、概ね理解しているようだった。新鮮な驚きだったのは、授業の最初の部分で韓国人の先生が、教室のホワイトボードに Objective として、Students will be

able to role-play using expression of suggestion and refusal. と書いた長い紙を張ったことであった。先生は、韓国語で一言二言、説明を加えて、その後すぐ英語に戻ったが、この英語の目的の紙は、子どもたちに知的刺激と明確な目的意識を与えていると思えた。教室内の教員と生徒が学習目的を理解し、共有し、グループ活動や全体活動を通じた協働の中で目的を達成していこうとする姿勢がうかがえた。

Lee Hyu Seong 校長先生のお話では、今後レベル別クラスを編成し、英才教育型のプログラムを作りたいとのことであった。英才クラスとして、帰国生や地域で能力の高い児童選び、1クラス 8人のクラスを 2 つ作る予定とのこと。公立の小学校の学校長がこのように英才教育を推進することは、日本の教育現場にはあまりない発想であり正直驚いたが、次に訪問したソウル国際学校ではさらにその驚愕の度合いは高まり、圧倒されっ放しとなるのであった。

ソウル国際高等学校(Seoul Global High School)は、開学して2年足らずの公立の寄宿学校で、世界のリーダーとなるエリートの韓国人を育てるというモットーのもと、1学年あたり 6 クラス 154 人の生徒が学んでいる。国際コースと一般コースの 2 コースがあり、前者は、韓国のみならず世界の名門大学に生徒を進学させることを目的とした、英語のイマージョン教育を行っている。英語以外にも、全員、中国語かスペイン語を学習することになっていて、学校を案内してくれた女子生徒は日本に留学経験があり日本語が大変流暢で、梨花女子大に飛び級で入学が決定しているとのことであった。

見学した授業の中でバイリンガリズムを研究する者として特に興味を持ったのは、アメリカの高校の AP(Advanced Placement)レベルの教科書を用いた「経済」の授業であった。英語のパワーポイントも使用し、Ph.D を持つ韓国人の教師が韓国語で説明をなさっていた。学校を案内して下さった Ha Hwa-ju 先生は、「母語の発達も大事であり、この授業では内容を母語で理解しているかを確認している」と述べられた。これは新たな概念を第一言語と第二言語で確認するというイマージョン教育の手法の一つである。日本の大学で求められている ESP 教育の観点からも、是非もう

一度訪問したい、という強い思いを胸にこの高校を後にした。

これらの学校訪問を通して、韓国では能力のある生徒を選別し、彼らに財政面、あるいは人的資源の面で手厚く援助をし、社会のリーダーやエリートとして養成しようとする、国家戦略としての教育のビジョンがはっきりと見てとれるのであった。

言語習得や英語教育に関して大きな示唆を得られた今回の視察見学であった。最後に、団長の樋口謙一郎先生には企画と実行に際し辛いところに手が届くご配慮を頂き、また、随所で通訳を務めて下さったことに厚くお礼申し上げたい。



安岩初等学校で校長先生の説明を聞く

パジュ英語村・アリラン放送・

デジタル図書館を訪問して

木村 隆 (椋山女学園大学)

河野先生と同じく、私も日本「アジア英語」学会に入会して間もない者である。本研修旅行世話人で勤務先の同僚でもある樋口先生に誘われて参加した。私からは 11 月 23 日に訪れた「アリラン放送」と、24 日の「京畿英語村パジュキャンプ」、そして 25 日に訪問した「デジタル図書館(Dibrary)」について報告する。

ソウル国際高校の後に訪問したアリラン放送は、韓国の国際放送交流財団によって設置された国際放送で、韓国に関するニュース、文化、教育、娯楽などの番組をテレビやラジオで全世界に配信している。同局に特徴的なのは、英語、中国語、スペイン語、韓国語など 7 力国語を使用して番組

を放送していることである。韓国のグローバル戦略の一端を垣間見たようなアリラン放送の見学であったが、日本「アジア英語」学会にとっては大変名誉なハプニングがあったことも報告しておきたい。私たちはラジオスタジオにも案内されたが、そのスタジオではちょうど韓国の有名なフォークロック歌手が英語でディスクジョッキーを務める音楽番組の放送中であった。なんと、その生放送に本学会会長の本名信行先生が飛び入りで出演されたのである。何の打合せもない、いきなりの出演依頼であったが、本名会長は堂々とディスクジョッキーのインタビューに答えられ、日本「アジア英語」学会の存在を世界中に知らしめられたのである。



アリラン放送に生出演する本名会長

翌 24 日の主な訪問先は「京畿英語村パジュキャンブ」であった。2002 年以来韓国各地に設立された英語村は、韓国の子供たちに擬似的留学空間を提供する施設として注目を集め、日本でも NHK 語学番組その他で紹介されてきている。しかし、私たちが、京畿道パジュキャンブを訪れた時、そこにはテレビで放映されていたような賑やかな光景はなかった。案内係の女性は「朝一番の訪問なので...」と言っていたが、私たちが施設を出る 12 時近くになってもメインストリートに人影はなかった。鳴り物入りで設立された英語村であるが、最近では、英語村設立当初の新味が薄れてきたことによる「理念の希薄化」をはじめ様々な問題点が指摘されている。

一方、施設見学から戻った私たちには嬉しいサプライズが用意されていた。パジュキャンブで 1

か月間の宿泊研修を受けている 5 人中・高教員との懇談であった。大学を卒業して数年という若い男女の教員は、われわれの質問に的確に答えてくれたばかりでなく、授業中の書き込みで埋まった英語村特製のテキストも惜しげもなく見せてくれたのである。確認が必要なことであろうが、京畿道の教員なら誰でも無償でこの 1 か月研修に参加できるとも聞いた。私たちが驚いたのは彼・彼女らの英語運用力である。1 名を除いて、海外留学の経験を持たない教師ばかりであったが、流暢な英語で韓国英語教育事情や自分自身の意見を語る姿に強い印象を受けた。彼らが言うには、最近の韓国では教師になるのが難しく、英語力においても TOEIC なら 900 点以上を取得している教師がほとんどとのことであった。

最後に、エクスカッションとして希望者のみを募って行われた「デジタル図書館」の見学について簡単に報告したい。韓国国立中央図書館に隣接する「デジタル図書館」は、世界に先駆けて昨年 5 月に開設された最新の図書館である。“digital” と “library” を合わせて “Dibrary” (ディブラリーと発音) と呼ばれている。この図書館が最新の情報機器・資源 (たとえば i-phone のような操作感を持つ大型タッチスクリーンや高品質デジタルコンテンツ) を備え、近未来を思わせるようなガラス張りの空間を持つことは予想通りだったが、障害を持った利用者にも図書館資源にアクセスできるよう様々な工夫がなされていたのには感心した。タッチスクリーンなどの主な機器は車椅子の利用者にも操作がしやすいように高さを変えられ、また手指の不自由な利用者のために球形のマウスや特殊な形のキーボードも用意されていた。音声ガイドは手話でも見ることができ、聴覚障害者の利用を助けている。書架の代わりに様々な PC 端末やスクリーンが置かれた、広々とした開放的な「閲覧室」を前にして、未来の図書館の姿を見た気がした。希望者のみに対して行われたのがもったいないほどの経験であった。

この研修旅行はまさに樋口先生ならではの細やかな気配りに満ちた旅行であった。充実したプログラムは言うに及ばず、車中での観光案内から、果ては新型インフルエンザ対策のマスクの準備やのど飴の差し入れにいたるまで、手作りの温かさや真心の伝わる旅行であった。ご自身が旅行の 1

週間前に新型インフルに倒れるというアクシデントを乗り越え、ここまでの研修旅行を準備してくださった樋口先生に、参加者を代表して心からの感謝を申し上げます。

2009 GETA International Conference

“Transforming Learners, Teachers,

and the English Classroom”

竹下裕子（東洋英和女学院大学）

2009年11月21日、韓国の光州広域市(Gwangju)の湖南大学(Honam University)において、Global English Teachers Association (GETA) が主催する国際学会が行なわれ、本学会からは、本名会長と竹下が参加した。JAF AE の韓国海外研修の直前のことであった。



光州は、朝鮮半島の南西部に位置する。その名は、古くは1929年の光州学生（抗日）事件、のちには1980年の

光州事件を通じて記憶しているかたも多いであろう。光州事件の発端は、反軍部民主化要求が活発化するなか、軍部の全斗煥[チョン・ドゥハン]が野党の金大中[キム・デジュン]らを逮捕・軟禁したことであった。金大中が光州出身であったことから、人々は光州を民主・人権・平和のまちと呼び、誇りをもっている。

GETA の国際大会は1日みの開催であったが、韓国各地と極東ロシアを含むアジア各国からの多くの参加者を得て、国際色豊かで大変に活気に満ちた大会であった。午前中の Plenary Session では、3名のスピーカーによる講演があった — (1) Seoul National University of Education の WonKey Lee 氏による “Trasforming ELT in Korea”、(2) 本名先生による “English across

Cultures and Diversity Management”、そして(3) 大会スポンサーの English Mou Mou の Sung Soo Kim 氏による “Preparations for Practicing Effective English Immersion Program in Korea”。英語は、アジアをつなぐ、多文化に基づいた、多様な言語であるという本名先生の英語の解釈は、多くの韓国の研究者に対して新鮮な響きを放ったに違いない。聴衆は大きな関心をもって、熱心に聞き入り、時折、差し込まれるユーモアを楽しんでいた。

午後には6つのセッションが同時進行したが、そのうちのひとつ、Featured Presentations では、韓国以外の6カ国から招かれた Featured Speakers が、次のとおりの独自の論を披露した — (1) Suchada Nammannit 氏 (タイ) による、 “Improving Students’ English Using Computer-Mediated Communication and Face-to-Face Discussions”、(2) Isabel Pefianco Martin 氏 (フィリピン) による “Error or Feature of English? Assessment in the Context of a Changing Language”、(3) Meei-ling Liaw 氏 (台湾) による “The First Decade of Elementary School EFL Education in Taiwan: Policy Planning, Implementation, and Evaluation”、(4) Marina Rassokha 氏 (極東ロシア) による “Language and Cultural Identity: From Theory to ELT Practice”、(5) 竹下による “The Extremely Short Story Competition (ESSC): A Way to Creative Writing”、そして最後に (5) Foo Chee Jan 氏 (シンガポール) による “Overcoming Classroom Obstacles: Teach to Enable Communication”。タイトルが示すとおり、どの話も、アジアにおける英語の役割と発展に寄与する構想に富むものであった。6名のスピーカーのうち、5名が女性であったことを加えておく。

Featured Presentations 以外の、主に韓国の研究者による他のセッションは、教授法に関するもの、教員研修に関するもの、学習法や ICT に関するもの、学習者に関するもの、そして授業運営に関するものであった。自分のセッションから離れられなかったため、残念ながらほかのセッションの発表を聞くことはできなかったが、どのセッションでも興味深い発表と熱心な質疑応答があったと聞いている。

GETA 国際大会の大会実行委員長は、湖南大学の Joo-Kyung Park 氏であった。『Understanding Asia』(本名・竹下編著、2008 年、センゲージ・ニング)に韓国の英語教育に関するエッセイの執筆を依頼したのがご縁で、2008 年末、ソウルにいた私に会いに来てくれた。この時私は、本名先生の『English as a Multicultural Language in Asian Contexts: Issues and Ideas』(2008 年、Kuroshio Publishers)を彼女にプレゼントしたのであるが、これを読んだ彼女が大変に感銘を受け、本名先生をぜひ GETA の Plenary Speaker に！と願ったのであった。

さらにこのご縁の裏には、そもそも『Understanding Asia』のエッセイの執筆者に Park 氏を推薦した、シンガポールの Foo Chee Jan 氏と本名先生の永年の友情があった。このように、ご縁がご縁を呼び、アジアをつなぐ英語を通じて研究者の交流が発展することは、アジア英語の研究者の本望である。

さて、本学会の全国大会に海外からの基調講演者を最後に招いてから久しい。GETA ほどの規模はかなわなくても、全国大会を利用して、日本以外で活動する研究者の話聞き、私たちの視野を広げ、発想に刺激を与えたい。そうすることができれば、若い研究者に活力を与えることにもなり、ひいては本学会のさらなる発展へとつなげることができると考える。民主・人権・平和のまちなあっても、結局、本学会に思いを馳せたのであった。



招待されたスピーカーたちと主催者たち

新 刊 書 籍 紹 介



『言語・文化・教育の融合を目指して— 国際的・学際的研究の視座から —』

生井健一・深田嘉昭
(編著)

開拓社 6,510 円 (税込)
ISBN:978-4-7589-2150-3

本学会理事の矢野安剛先生(早稲田大学名誉教授)の古稀記念論文集。学際、国際、職際の観点から、諸分野の融合・インターフェイスを目指した論文集。26 名が執筆に関わっています。

海 外 研 修 に つ い て

既にメール配信で連絡しておりますが、2010 年度の海外研修を中国・広州で行ないます。なお、2010 年 4 月より新理事会が発足いたしますので、4 月以降、研修の詳細に関して、新理事会のご意向を反映させていただきます。所属機関等への証明として必要な会員には、参加証を本学会より発行させていただきます。皆様のご参加をお待ちしております。

日程：2010 年 6 月 17 日(木)～21 日(月)

場所：中国・広州市

内容：International Association for Intercultural Communication Studies (IAICS)と South China University of Technology (華南理工大學)の主催による国際会議、「Culture, Communication and Adaptation in Global Context」の参加を中心に、IAICS 会員および中国人研究者らとの懇談、広州市観光などを含む

参加方法：

① IAICS にて研究発表、パネル、ワークショップを希望する場合：1 月 30 日までにアプストラクト/プロポーザルを本学会事務局に提出の必要あり

<http://www.uri.edu/iaics/conference/Call%20for%20Papers-IAICS%202010.pdf>

② IAICS にて研究発表などを行なわない場合：参加のご意思を 2 月中旬までに事務局に連絡

のこと。IAICS 参加者として、主催者が企画するすべてのイベントに参加可

宿泊：IAICS 推奨のホテル

費用：航空券代、宿泊費、IAICS 参加費など
(未確定部分が確定し次第、総額を通知)

問い合わせ先：本学会事務局 jafae@live.jp

次回全国大会について

第26回全国大会は、2010年7月3日(土)、神戸芸術工科大学において、岡村光浩会員を実行委員長として開催いたします。

事務局より

会員名簿に記載されている内容に変更があった場合、速やかに事務局にお届けください。また、Eメールを使って会員にご連絡する機会が増えております。会員名簿にEメールアドレスを載せていない会員には、ニュースレターなどの送付ができておりません。事務局にアドレスをお知らせください。

会計担当より

現在、2009年度の会費の納入を受け付けております。納入方お願い致します。会費は、一般会員5,000円、学生会員3,000円です。

ゆうちょ銀行以外の金融口座からもお振り込みいただけるようになりました。振込口座は下記の通りです。

★ゆうちょ銀行(郵便局)からは、
加入者名：日本「アジア英語」学会

口座番号：00280-8-3239

★銀行などからは、

ゆうちょ銀行

〇二九店(ゼロニキユウ店)

当座預金口座 0003239

ニホン「アジアエイゴ」ガッカイ

海外学会情報

Thailand TESOL, "ELT in the Next Decade: Sharing, Caring, and Daring"

Date: January 28-30, 2010

Venue: Twin Towers Hotel, Bangkok, Thailand

E-mail ubon_s@hotmail.com

Website <http://www.thaitesol.org>

6th CamTESOL Conference on English Language Teaching, "One World: World Englishes"

Date: February 27-28, 2010

Venue: National Institute of Education (NIE),
Norodom Blvd corner Suramarit street, Phnom Penh, Cambodia

E-mail info@camtesol.org

Website <http://www.camtesol.org>

TESOL Arabia, "Transformations in TESOL"

Date: March 11-13, 2010

Venue: Zayed University Convention Center,
Dubai, United Arab Emirates

E-mail jkennedy@hct.ac.ae

Website <http://www.tesolarabia.org/conference/>

ニュースレター編集担当より

JAF AE ニュースレター31号は8月上旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、800~1,200字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。書いてみようというご意志がありましたら、6月中旬までに編集担当(相川 aikawa@nnc.or.jp)までご連絡下さい。

2010年1月16日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

事務局

〒226-0015

神奈川県横浜市緑区三保町32

東洋英和女学院大学国際社会学部

竹下裕子研究室内

Fax: 045-922-6642 E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Yuko Takeshita

Faculty of Social Sciences

Toyo Eiwa University

32 Miho-cho, Midori-ku, Yokohama-shi,

Kanagawa 226-0015 JAPAN

FAX: +81-45-922-6642 E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's website: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:
00280-8-3239